（ 続紙 １）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	川瀬　慈
論文題目	アフリカにおける創発的な映像表象の地域研究		

（論文内容の要旨）

本論文は、エチオピア北部高原に暮らす二つの音楽職能集団ラリベロッチとアズマリ、そして地方都市ゴンダールの路上で生活する子どもたち（ストリートチルドレン）という計三つの周辺化された人々を対象におこなった民族誌的調査の報告と、それをもとにして制作した映像作品『ラリベロッチ - 終わりなき祝福に生きる - 』、『僕らの時代は』、『Room 11, Ethiopia Hotel』から構成されている。論文（文字部分）では、地域研究を基礎にした被写体の民族誌的記述に加えて、映像作品の公開を通じて、制作者（著者）、被写体となった人びと、そして作品の視聴者の三者が創造的な相互作用を経験するという創発的な映像表象を創り上げていく新しい地域研究の方法論的可能性について考察している。論文の映像部分では、三つの独立した映像作品のなかで、それぞれの集団の社会的特徴を描出している。５章からなる論文の文字部分と、三作品からなる映像部分は相互参照的に構成され不可分の関係となっている。

第１章は、 民族誌映画制作をめぐる議論の動向を踏まえ、地域研究者にとって、研究の公表や現地社会への成果の還元を進めてゆく上で、民族誌映画制作の有効性が無視できないものとなりつつある現状についてまとめている。機材の利便化・低価格化によって容易に制作できるものとなった映像作品は、完結した研究成果としてとらえるだけではなく、多様なアクター間の相互作用の中にある実践と位置付け、公開という行為を通して常に創発的に、多様な解釈を生み出していく可能性があることを指摘している。

第２章は、音楽職能集団ラリベロッチとアズマリ、およびストリートチルドレンの民族誌的記述を行い、両集団を対象にした映像作品の背景を描いている。二つの音楽職能集団に共通の特質として、集団の自称をそなえ、隠語や婚姻等の境界線の設定により差異化をはかってきたこと、また社会背景や聴衆の容姿、職業などにあわせた歌詞を即興で創作することを指摘している。その歌詞は、聴き手たちとのやりとりを通じて生み出される。音楽職能集団の歌詞を固定的かつ完結したテキストとして理解するだけでなく、パフォーマンスの過程の中で、聴き手との相互行為を通じて常に変化し創造されるものとしてとらえる必要があることを明らかにした。ストリートチルドレンに関しては、地方都市ゴンダールにおける聞き取り調査をもとに、子供たちが従事する経済活動の種類を示し、都市の路上を危険が溢れる場として否定的にとらえるだけでなく、社会的な規範や価値観を学び、多様な経済活動をおこなう場として肯定的にとらえる立場から、映像作品の背景となる子どもたちの生活実践を記述している。

第３章は、三つの映像作品の撮影対象となった人びとと制作者との交渉の過程、制作の目的、背景について述べ、各作品のシークエンスと、撮影・編集における留意事項を記している。

『ラリベロッチ』は、聴衆との相互行為の中に成立する路上のパフォーマンスを、音楽職能集団の旅と生活を追いながら捉えている。『僕らの時代は』と『Room 11』は、音楽職能民とストリートチルドレンという異なる範疇の人びとを扱いながら、都市に生業をもとめる同世代の少年たちの日常を対象に、制作者自らが、アムハラ語や隠語を用いて被写体と会話や議論を行い、その様子を作品の主な構成要素にしている。これまでの民族誌映画の制作においては、撮影時に被写体にできるだけ干渉しない撮影方法を奨励したり、被写体への干渉を隠したりする傾向がある。本論文の映像部分では、制作の過程で交わされる制作者・被写体間の議論を映像の中であえて開示し、撮影プロセス自体を作品の中に戦略的に写し込み、視聴者に明示している。特に『Room 11』では、制作者の被写体への関与そのものが映像作品の構成要素となっている。

第４章は、本論文の映像作品に関して、被写体となった人々を対象に実施した上映会、国際民族誌映画祭等において交わされた議論と問題点を報告している。被写体へのフィードバック上映に関しては、内部集団間のポリティクスに配慮し、作品の送り手・受け手間で相互に意見を交換しやすい上映環境を築く必要があることが示唆された。民族誌映画祭での『Room 11』をめぐる議論を通じて、被写体の視線そのものを作品に取り込むという表現上の新たな試みが生起した経過を紹介している。

第５章では、以上を総合して、映像作品の公表を前提とした研究者と視聴者、研究者と被写体（被調査者）の相互作用による創発的な映像実践のありかたについて考察している。地域研究者が、調査対象の人々や視聴者と、映像表象という即時かつ容易に再生可能な媒体の特性を生かして互いに学び合う経験をもつことを通じて、制作者のカメラのまえの「おこない」や「ふるまい」を自覚的にとらえなおし、映像表象のありかたをめぐる視聴者との議論を研究にとりいれていくことの必要性を説いている。研究者が、他者との相互作用を通じて再帰的に生成される創発的営みとして、地域研究の未来形が切り開かれる可能性を示唆している。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、エチオピア北部高原に暮らす音楽職能集団ラリベロッチとアズマリ、そして地方都市ゴンダールの路上で生活する子どもたち（ストリートチルドレン）を対象にした民族誌的調査の報告論文と、本文と相互参照的に制作された三つの映像作品『ラリベロッチ–終わりなき祝福に生きる–』、『僕らの時代は』、『Room 11, Ethiopia Hotel』から構成されている。

本論文の目的は、まずフィールドワークに基づく地域研究によって、映像と文字を媒体とした民族誌的記述をおこなうことにある。そのうえで、制作者、被写体となった人びと、作品の視聴者の三者が、映像作品の制作と公開の過程を通じて経験する創造的な相互作用を論文に再帰的に反映させていくことを、地域研究の新しい方法論として提示することを目指している。申請者は、この過程で創造される映像を創発的な映像表象と呼んでいる。

本論文の学術的な貢献として以下の三点をあげることができる。

第一に、エチオピアの音楽職能集団ラリベロッチとアズマリを対象にした長期のフィールドワークを通じて、これまで概括的にしか報告されていなかった両集団の生業としての音楽実践の実態を映像と文章を用いて詳細に明らかにした。特に、二つの音楽職能集団に共通の特質として、隠語や婚姻規制などによって自他の境界を明確に設定してきたこと、聴き手との相互行為を通じて歌詞を即興で創作する創造的なパフォーマンスがおこなわれていることを見いだした。また、地方都市ゴンダールのストリートチルドレンに関しては、映像作品の背景となる子どもたちの経済活動について定量的に明らかにした。

第二の学術的貢献は、編集や撮影技法の面から見ても完成度の高い三つの学術映像作品を制作したことにある。加えて、制作者と被写体との間に生起する相互関係そのものを、映像表象としてとりあげるという革新的な手法を実現した点は高く評価できる。音楽職能集団の旅と生活に入り込んで撮った作品『ラリベロッチ』では、聴衆との相互行為の中に成立する路上のパフォーマンスを主題とし、音楽職能民とストリートチルドレンという異なる範疇の人びとを扱った『僕らの時代は』と『Room 11』の二作品では、都市に生業をもとめる同世代の少年たちの日常を対象にした。三作品すべてにおいて、制作者自らがアムハラ語や隠語を用いて被写体と会話や議論を行い、その様子を映像の中であえて開示し、撮影プロセス自体を作品の構成要素として戦略的に写し込み、視聴者に明示することに成功している。被写体への干渉を排除し隠蔽するこれまでの民族誌映画の枠を離れ、客観的・実証的な事実や現実の提示という装いを潔く捨てて、新たな他者表象のありかたに果敢に挑戦している。

本論文の第三の学術的貢献は、映像作品の被写体となった人々を対象に実施した上映会や、その他の第三者による視聴において交わされた議論や問題点を報告し、研究者と被写体（被調査者）、あるいは研究者と視聴者の、相互作用による創発的な映像実践として被写体の視線そのものを作品に取り込むという表現上の新たな試みを実

行するだけでなく、その行為が生起した経過そのものを研究論文の俎上にあげている点にある。

以上のように本論文は、映像表象という即時かつ容易に再生可能な媒体の特性を生かして互いに学び合う経験を通じて、地域研究が、調査対象の人々や視聴者と研究者の相互作用を通じて再帰的に生成される創発的営みとして展開することが可能であることを示した。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 22 年 1 月 21 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。